



# 菜の花のように

著者 佐藤廣枝

## 菜の花のように

私は菜の花が大好き

誰にでも惜しみなく笑顔を振りまいてくれる

小さい可愛い花だけど

みんなで心つないで大自然の中で

太陽の日差しを浴びて咲き誇る

いっぱい いっぱい実をつけて

大地に広がる菜の花畑は

感動と夢を与えてくれる

一粒万倍とは菜の花のことよ

母が教えてくれた

私もこの大地に生きる命を菜の花のように

みんなと仲良く手をつなぎ

心重ねて命の花を咲かせたい

## 目次

まえがき 4

第一章 大切な家族 6

第二章 暖かい気持ち 41

第三章 生まれ育った広島 70

第四章 母の言葉 95

第五章 私の人生 113

第六章 四十八句集 139

あとがき 161

まえがき

私がこの本を出すきっかけになったのは、私の尊敬するオーストラリア シドニー在住の絵本作家「森本順子先生」のおかげです。

あれは2008年被爆者地球一周証言航海の長い旅。130日の間で出会い、同じ班になり、活動を共にする中で築いた信頼関係が始まりでした。文字嫌いの私にパソコンを教えてください、メール等、文字に触れることを教えていただきました。

「あんたの言葉は消さないで残しておきなさい。」言われるままに全部ではありませんが、一部残しておきました。それを孫が見て、ばあちゃんの言葉は私にもわかるよ。そう言って積極的に編集構成までしてくれました。「電通大3回生の7番目の孫」中国 北京へ一年間留学していて、一年ぶりに見舞に来てくれ、励ましてくれました。

私の言葉が孫の心に伝わる、それは驚きでした。その上、「編集してこれを2人の思い出に出版しよう。3月までなら広島にいるから。」と言う。照れくさくも、恥ずかしさもありましたが、手作りで孫との共作。こんな機会をいただくのも、縁。きっとこれも天からの贈り物、いやご褒美かとも思いました。

原爆、二度の台風、戦後生きるために北海道中標津の酪農農家へ3年4ヶ月、帰広（広島へ帰ること）してから学歴のない私は就職試験すら受けられませんでした。自分にできることを探し、自力で自営するしかありません。それでもいろんなことを経験し、負けないで、根性一つで自分の信じる道をひたすら歩いてきました。

今5人の子宝に恵まれ、21人の孫、ひ孫が1人生まれ、大家族の中で好きなボランティアをしています。そこで仲間の人たちや、平和公園に来る学生たちや、ホテルや学校に出前講演に出向き、子供に被爆者の一人として真実を語り継ぐことを使命としています。また、子供たちに囲まれる幸せもかみしめています。この作品は私の人生でもあります。一つでも共感していただければ幸いです。

この本を編集してくれた孫は私の7番目の孫で菜笑と言います。息子が一度限りの人生を皆の中で笑って生きるようにと願いを込めて名付けました。私の17番目の孫も女の子です。娘婿がお兄さんにあやかり、菜々美と名付けました。そこで私の大好きな菜の花にちなんで、題名を「菜の花のように」としました。

佐藤 廣枝

## 第一章 大切な家族

## 師匠

桜並木を散歩していた  
つまずいてふりかえると  
桜の老木が朽ちていた  
皮の残った部分に若草が風に揺れて  
私達は生きてるよ  
と私を呼び止めた  
しゃがみこむとわずかに形を残す幹  
無数の穴が開いて  
虫たちが元気に動いてる  
私は思わずご苦労さん

春には爛漫と咲き誇り  
夢や希望を与えてくれた

夏はさつそうと茂り  
日差しから守ってくれた  
秋の紅葉は使命を果たした  
喜びに燃えていた  
冬は花芽をしつかり抱いて  
風雪に耐えていた

何度繰り返したことだろう  
朽ち果てた今も  
新たな命をはぐくんでいる  
お前は私の師匠だねありがとう  
手を合わせると  
なき母の顔が笑ってた



## 炭追い

今思い出しました

母と2人で

台風に襲われ実りのない秋を迎えた時

炭やまきを山から背負って

駄賃稼ぎをした時を

おいこを背負って山に登るの

道のない斜面を

誰かが付けた足跡を頼りに

右足に力を入れて体重をかけたら

左足を前に出すの

左に体重をかけたら右足を

交互に体重を乗せながら登るの

荷物を背負って下りるときの

力を残しておくために

そして自分の体重ぐらいの荷物を背負って山から下りる

足がぐがくふるえる

横向きで一歩ずつ踏みしめながら降りる

間違えば谷底まで転げ落ちる

命がけだった

生きるということとは

我慢すること 絶えること

辛抱する木に花が咲く

そう言われて頑張った昔

澄み切った秋空に白い雲がなびく

木立が風に歌うやさしいせせらぎ

苦しい重労働の中

つらいとは思わなかったのは

なぜだろう

今懐かしく思い出す



## 母の歌声

あれは田植えが終わり 緑の風邪が爽やかな初夏  
学校から帰ると庭先で母の歌声が聞こえた  
なんと澄んだきれいな声 美しい旋律  
ただいまの声が出ない そーっと縁側に近づく  
天然の美の1番を  
針仕事しながら繰り返し歌ってる  
なんと美しい詩 なんときれいな優しい声  
私温かく包んでくれる  
貧しい農家の中で 心満たされたひと時  
今 思い出しても  
ほのぼのと暖かく聞こえてくる  
「空にさえずる鳥の声 峰より落ちる滝の音」  
胸が熱くなぜか涙がこぼれ落ちる

## 甘えん坊の私

あのね 私甘えてみたい  
そんな気持ちになることがあるの  
遠い昔 陽のあたる縁側で  
お母さんの膝枕で 頭をなでてもらいながら  
お昼寝したことがあるの  
白い雲が流れ  
ひまわりが子守唄を歌ってくれた  
この年になっても  
お母さんの膝枕で眠りたい  
童心に返り 甘えてみたい  
おかしいでしょう  
目を閉じれば聞こえてくるの  
母が歌う天然の美が  
今夜は夢の中で甘えよう



## 母の夢

夕べ久しぶりに母の夢を見ました  
いくつになっても母を慕う気持ちはね  
幼い頃と同じです  
確か自分が一人前になつたと思い  
口答えたこともあつたのに  
昨夜 夢に出た母は お気に入り  
の矢絰の着物を着て  
お座りをして優しく笑いかけてくれた  
思わず お母ちゃんと叫ぶ  
お母ちゃん お母ちゃん・・・  
自分の声で目が覚めた  
誰もいない一人の部屋で窓のカーテンが  
かすかに揺れた  
なんとなくセンチメンタルになる今朝の目覚め  
一言何か言つてほしかった

## 思い出

あれは原爆が投下された翌年  
6月に妹が生まれた  
産後のお手伝いさんが帰ると  
長女の私は忙しくなる  
友達が泳ぎにさそつてくれた  
私が出かけようとすると  
母に呼び止められた  
おしめを洗ってから行きなさい  
しぶしぶと友達を見送る  
庭のコスモも悲しげに風に揺っていた



## 心残り

14歳のとき

北海道の母の妹に預けられたの

それは中学3年生の12月

急行安芸で大阪へ

大阪で日本海に乗り換え

青森 函館

青函連絡船に乗り

釧路へ狩勝峠で

じゃじゃぽつぽ

じゃじゃぽつぽ

黒い煙をはく機関車が

前と後ろでうなつてた

釧路から標津線に乗り換え

中標津に着いた



なんと8日間の長旅

ついた中標津は別世界

そこで3年4ヶ月鍛えてもらった

そのおかげで今の私がある

帰り際 子供のいない叔母は

私にすがりつくようにして

「1度でいいからお母さんと呼んでくれないか」

世界中で母と呼べるのは一人しかおらん

懇願する叔母を振り切り北海道を後にした

すべてが雪にとざされた4月の事

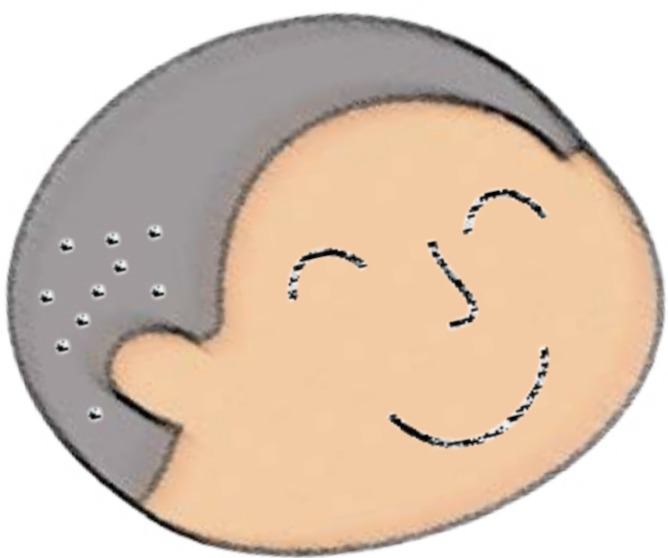
今も馬櫓に手をかけて

追いつがる叔母の顔が涙を誘う

## 兄

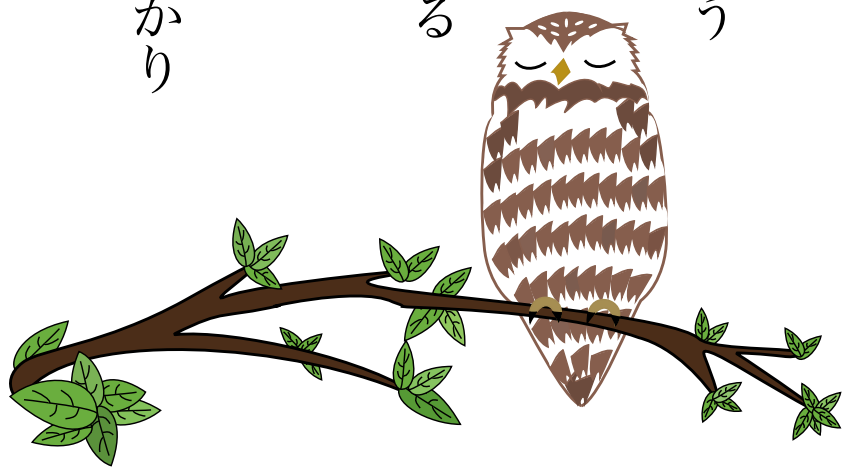
私はお兄ちゃんが大好きだった  
私と6歳も離れてたの  
ハンサムでね 優しくってね  
おうちの仕事を手伝っているときはね  
とっても頼もしかったのよ  
私はね いつも兄を自慢して  
大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになるの  
そういつて仲良しの康子ちゃんを  
兄に近付けないようにしていた  
そんなお兄ちゃんが私が小学校の1年になったとき  
学徒動員で原爆の犠牲になったの  
遺品もお骨も何一つ残さず  
もちろん別れの言葉も

でもね 今も思い出すお兄ちゃんは  
丸坊主の中学1年生のまま  
優しい笑顔で広枝ちゃんと呼んでくれるの  
声が聞こえるの  
するとね 一滴の涙がこぼれるのよ  
75歳の今もお兄ちゃんに甘えたい私



## 妹

私には妹が二人いる 一人は5才離れてる  
一寸テンポが遅く  
おのろさんというあだ名がついていた  
その言葉が嫌いで  
年下の妹に言われても 泣き出してしまふ  
食事は特に時間がかかる  
夕ご飯は途中で居眠りを始める  
あつ と大声を出すを目をまん丸にあける  
また居眠りを始める「こくりこくり」と  
コラ としかられるとべそをかく  
それが皆の笑いを呼ぶ 本人は眠たいばかり  
私はそつと 抱きかかえておふとんへ  
外でふくろうが鳴いていた



## 妹

8つ年下の妹は  
一人で留守番が出来るようになっていた  
遊び道具のない時代  
母が座布団を丸めて このお人形をお守りしていてね  
妹の背中に腰ひもで背負わせる  
うなずいてにつこり笑うかわいい妹  
皆で畑に出かける  
夕飯のとき もう下ろしてあげなさい  
妹は首を振る  
私が紐を解こうとするとべそをかく  
わかったよというにつこり笑う  
皆も笑う 庭のお月様も笑ってた



## 弟

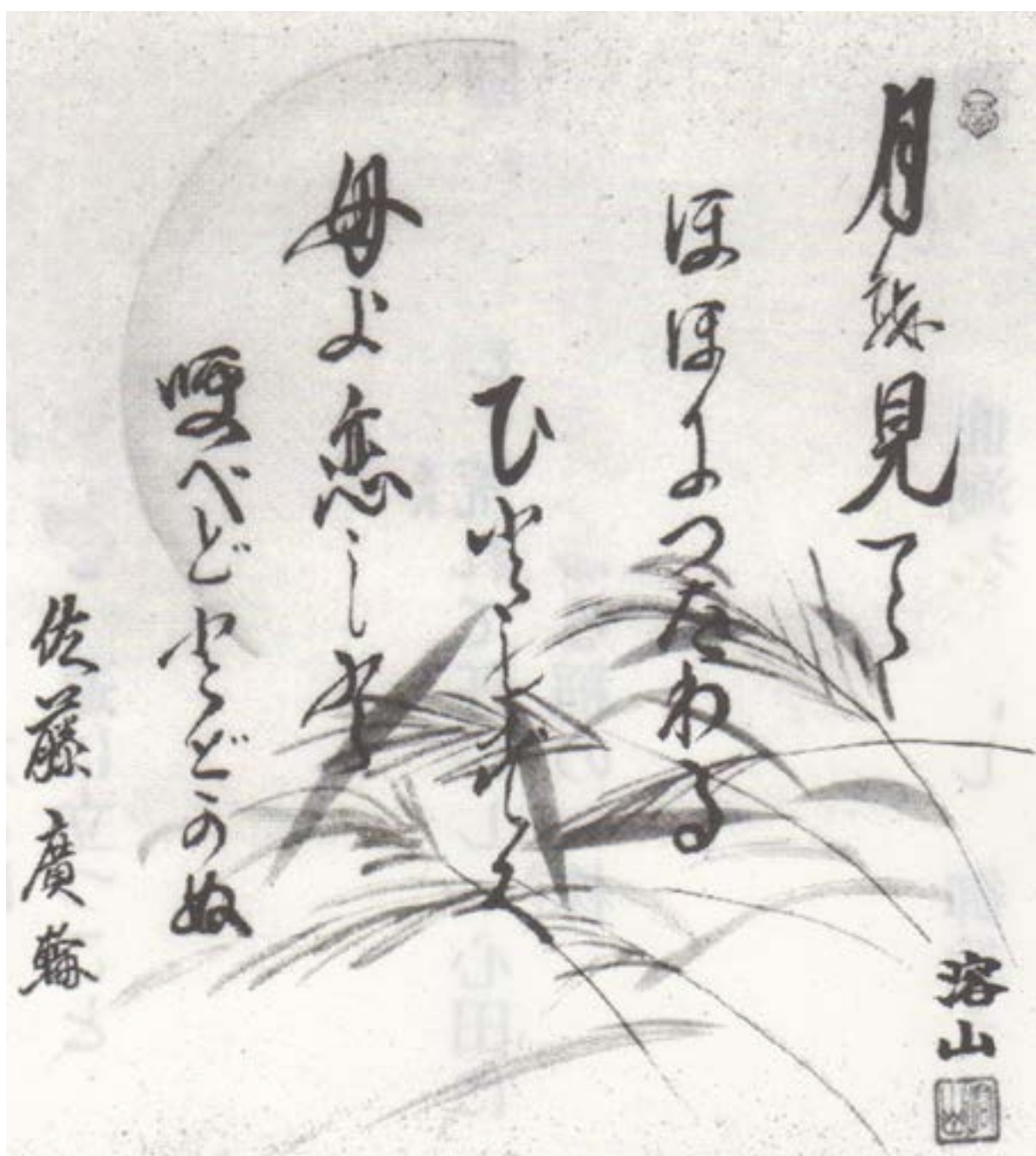
私の弟は2歳違い 同じ環境で育ち 同じ被爆者  
なのに50歳後半にがんに侵された  
子供が7人もいて 末っ子は幼稚園  
治療しても手おくれ すぐに放射線治療が始める  
弟はショックで氣力をなくし 死にたい病がついた  
私は必死に励ました  
皆が力を貸すから体を治すことだけ考えて  
私達はどちらが先にお迎えが来ても一生懸命生き抜いて  
お母さんただいま そう言おう  
大好きなお母さんからいただいた命大事にしよう  
弟はうなずいて3年間頑張り 60歳で還った  
私は今75歳 今年13回忌を済ませた  
お墓のそばの彼岸花が優しく微笑んでくれた

## お彼岸

目の前のカレンダー  
9月「23」の赤い文字

お彼岸の中日  
白いベッドの上でお座りをして手を合わせ  
原爆で大好きな兄を亡くしてから  
父母 弟 友人 恩師 大切な人  
沢山の人を、おみおくりした  
頭の中を回り灯籠のように  
なくなった方々の顔  
思い出が限りなく回る  
75年 生かされている歴史の中で





## 初めてのお産

私始めてのお産を迎えたとき  
母が付き添ってくれたの  
私の苦しむ顔を覗き込みながら  
まだまだと言い川を見に行きました  
すぐに帰ってきて  
今ね引き潮だからまだまだまだ時間がかかるよ  
おうちに帰ってくるからな  
母は病室から出て行つた  
母が帰って30分後  
陣痛がひどくなり  
分娩部室に連れて行かれた  
母がいない 不安が襲う  
痛みが激しくなる

先生の声 看護師さんの声  
助産師さんがお腹をおさえる  
言われるまま力を振り絞つた  
産声が聞こえた  
元気な男の子と聞かされホツとする  
わが子を見たとき  
痛みはすべて飛んでいった  
しかしは母への恨みは残つた  
病室へ帰りわが子を手にした時  
言葉では言い尽くせない感動と喜び  
母が駆けつけたとき  
最高の笑顔で孫を抱き上げてくれた  
小言もうらみもどこかへとんでいった  
8月の暑い日の昼下がりに

## 長男の結婚

私に5人の子供がいる

長女 長男 次男 次女 三男

男が3人 女が2人

結婚はもちろん順番ではないですね

長女のところ 次男のところ

次々と子供が生まれた

それに刺激され

結婚を意識したのは

30歳を過ぎていた

我が家では長男が一番最後に結婚した

他の姉弟のところに

続々と子宝が授かる中

羨ましそうに見ては祝儀を運んでいた

そんな姿が私には

不憫でもあり 愛しくもあつた

でも結婚しない宣言をしていた息子が

結婚してくれた時は

本当にうれしかった

最後の結婚式を挙げたとき

安堵した気持ちも手伝って

どれほど感激したか

何倍もの熱い涙を流した

親の責任を果たせた喜びが重なり合って

すべてがバラ色に輝いて見えた



## 長男に子宝が授かった日

あれは今から20年前

桜の花が咲くころ

長男のところに子どもが生まれた

急いでお嫁さんの母親と駆け付けた

元気で真っ赤な少し小さい赤ちゃんだった

皆で喜びを分かち合い

笑い声をこだまさせた

夕方もう一度差し入れをもつて見舞ってみると

なんと膝の上に赤ん坊を抱いて

じつと我が子の顔を見つめている息子

すると嫁さんが

お母さんもう2時間もこうしているんです　と言う

本当におめでとう

それ以上の言葉は出なかった

まるで宝物を大事に抱え

周りの景色が見えないほど

顔を見つめ

小さな表情にうなずいている姿

父親の愛情があふれてた

言葉少なに病院を出ると

日は暮れ

祝うように

星がキラキラ輝いていた



## 初めての子供への名付

ある日息子が真剣な顔をして

子供の名前は

親が最初にしてあげられるプレゼントですよ

私はそうねとうなずいた

すると息子が錦帯橋の桜を見てきた

確かに見事だったけど

僕には裾に広がる菜の花が印象的だった

人生は一度限りだよ

一度限りの人生を

菜の花のように群れの中で咲いてほしい

人の中で笑顔で生き抜いてほしい

名前は「菜笑」と決めた

私は息子に共感したが

菜の花は弱々しいと

周りから聞こえた

しかし頑として聞き入れず

お母さんにとって

7番目の孫ですよ

それにちなんでもいい名前でしょう

得意げな顔をして届けに行く

息子の後ろ姿は

春の日差しにまぶしくも

頼もしくも見えた



## 初孫の誕生

忘れもしない

夏真つ盛りの暑い日

1988年8月8日

初孫の誕生

知らせを受けて駆け付けた

まさに赤ちゃん

真っ赤な元気な男の子

胸にこみ上げる喜び

涙が止まらない

我が子を抱きしめお乳を飲ませる

母親になった娘と孫

8月の太陽に眩しく輝いていた



## 夢

あなたはどんな夢を追いますか

私はね

子供が5人いるの

孫はね21人

ひ孫は1人8月に生まれたの

こんなに沢山いるとね

私の年金では何にも出来ないの

お年玉だつて上げられない

今はねそんなこと全部あきらめて

私の生きた足跡を残すと決めたの

それは一生懸命生きて生き抜いて

皆に平等の思い出を残すために

## 愛の賛歌

あなたはどれだけの人に愛された  
私は愛されて大きくなった  
おじいちゃん おばあちゃん  
お父さん お母さん お兄ちゃん  
可愛いがられて愛されて  
私は優しい子になった  
弟妹だって お友達も  
みんな仲良くすることを教えられた  
愛されて愛しているうちに  
いつか母になる  
我が子を手のひらに抱いた時  
大きな大きな無償の愛を知りました  
命に代えても守りたい我が子

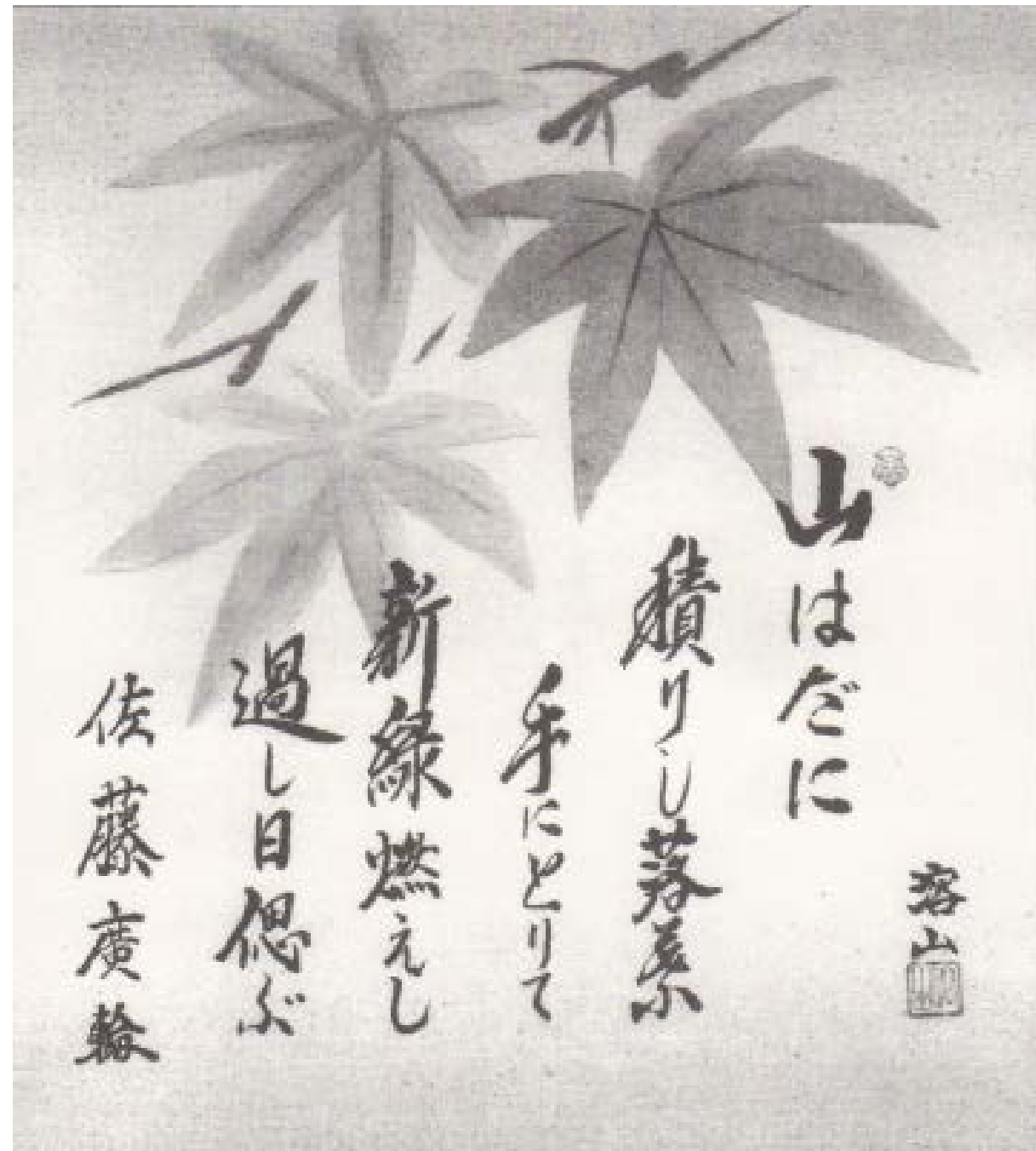
目に入れても痛くないほど愛しい孫とひ孫  
手を伸ばしても  
今はみんなには届かない  
それでも送り続ける愛がある  
頑張れコールを送る愛  
私の願いはただ一つ  
母の言葉を守るだけ  
人の為に生きる事が我が喜びになる  
真の愛に生きてくれ  
私は誓う  
人を愛する賛歌を  
命を尊ぶ賛歌を  
平和を愛する賛歌を  
命の限り歌い続ける

## 愛しい孫

私には孫が21人いるの  
いとこ似って 知ってますか  
本当によく似てるんですよ  
21人も孫がいるとね  
本当にとまどう  
でもね みんなかわいいの  
大学生になると不思議  
女の子は母親に  
男の子は父親に  
声まで似てくるの  
電話の声はいつも迷う  
そのたび笑われたりするけれど  
声変わりするほど成長してくれて嬉しい

お父さんそっくり  
お母さんそっくり  
健やかに 健やかに  
見上げる青い空  
ポカリと浮かぶ雲に孫の顔が重なる  
我が人生に悔いはない  
頬をなでる風が歌ってくれる





## 第二章 暖かい気持ち



## 実らなかった初恋

初恋は不思議なものですね  
周りの景色をすべて消す 一人しか見えないの  
見えるのは あなただけ  
一人の時は息をするのも苦しいほどに  
会いたい おそばに行きたい  
知らず知らずに叫んでる  
胸ののときめきは 機関車みたい  
張り裂けそうに苦しくて震えてた  
会えば言葉も出ないのに  
遠くから見ているだけでときめくの  
実らなかった私の初恋  
遠い昔のことだけど 思い出は愛おしい

## 憧れ

私ね18歳の乙女の頃  
初めて心を奪われた人がいたの  
それはね

看護学校の倫理の先生

話される言葉がじんじん心にしみて  
笑顔もしぐさも女性らしくってね  
本当にしびれちゃった  
私もあんな素敵女性になりたい  
憧れたわー

真っ赤に染まるもみじに  
あ那时的先生の顔が見える  
青い空を見上げる 思い出は暖かい  
小春日和の昼下がり



## 19歳の思い出

私ね19歳のとき

1つ年下の大学生に惚れられたの

私がバスガールをしていた時

毎日変わる私の路線を知っていたね

乗り込んできて 一番後ろの席に座って降りないの

ただじつと私を見ているだけ

聞けば 私をかわいがってくださった

島のおばさんの親戚とか

私がお墓参りに行ったとき見掛け

所在を聞いてバス停で待ってたの

私のバスに出会うまで何時間待ったのだろう

そうまでして乗ってきたこと

後で話を聞いてびつくり

なんども何度も繰り返しているうちに 私に家に誘った

母に島のおばさんの親戚と話すと

母は丁寧に迎え夕食まで支度してくれた

バス停まで送る

初めて肩を並べて歩いた 別れに握手した

その手はびつしより汗で濡れていた

その感触は今も 手のひらに残ってる

母はあの人は良家のお坊ちゃん

お付き合いはだめですよ

言われなくても思ってたがハイと返事して

お別れの手紙を書いた

あれつきり別々の人生を歩いた

今お世話になった人たちはいない

島へ行くこともない消息すら知らない

でも思い出すのはなぜだろう

## 初恋の味

私ね70歳を過ぎて素敵な人に出会ったの  
年はね80歳くらい  
私にないもの沢山持つてる人  
尊敬したの  
あこがれたわ  
この人のお役に立ちたい  
ほんの少しお手伝い出来たとき  
本当にうれしかった  
まるでね 遠い昔の  
初恋の味みたい

## 胸のときめき

私ね75歳の今 胸のときめきを感じるの  
まるで乙女の頃のように  
憧れの人の笑顔が見たい  
お役にたちたい  
それだけが私の願い おかしいかしら  
元気な声を聞くと嬉しいし  
か細い声を聞くと涙がこぼれる  
南半球に住む素敵な人  
どうぞお元気でと北半球から無事を祈る  
七夕さんに会えたらと・・・  
はかない夢に望をつないで  
白い雲に思いを乗せる



## 憧れが尊敬に

人は一生のうちに

何人尊敬できる人に出会えるのだろう

私にとって一番尊敬できるのが母

大好きなのも母

誇りに思うのも母

狭い視野の中で生きてきた

小学校のとき疎開先で優しくしてくださった先生

子供ながらにあこがれた

それは母親に似た優しさで

今も私を見守ってくださる

励ましてくださる先生は 今87歳 私は75歳

近くを通れば必ず立ち寄る

一人暮らしの先生はお茶だけでなく食事まで

私は出されるたびに いつも甘える

もちろん仕事でも応援してくださる

この世でただ一人甘えられる人

60数年のときを越え 童心の世界へさそう

先生どうぞお元気で

目が覚めれば 祈ってる

感

謝

## 友達

友達は素敵ね

何年振りの再会も

出会えば喜び抱き合って

お料理だつておいしいわ

はずむこえ 笑い声

枕を並べて横になる

語り尽さない思い出話

西に傾くお月様

目を細めて 笑いつつ

明日があるよ お休みなさい

それでも眠れぬ旅の夜

## 春爛漫

春は誰にも夢を運んでくれる

卒業 旅立ち 入学 親も子も

咲き誇る桜見上げ

大地に広がる菜の花に

無限に広がる 夢 希望

甘い優しい桜吹雪

人生の幸せに酔いしれる



## 七十五歳のお月見

お月様ありがとう  
心の中まで照らしてくれて  
童心に返れば優しい気持ちになれたよ  
金色の輝きに抱かれて夢の中  
ウサギさんこんなに沢山お餅について  
私が丸めてあげましょう  
みんなにみんなにあげましょう



## 朝日昇れば

どんなに疲れて帰っても一夜眠れば  
壁にかけたカレンダーの  
赤いペンで記された文字が 日に映えて  
今日の仕事はこれですよと呼びかける  
窓を開けると秋風が  
そーっと 背中を押して呉れる  
大きく深呼吸をして外に出る  
お隣さんのコスモスが  
優しく微笑んで見送ってくれる  
私は鼻歌を歌の  
今日も一日頑張ろうと

## ホオズキ

真っ赤な真っ赤なホオズキさん  
なんとかかわいらしいことでしょう  
色艶よくて輝いて幸せそう  
見つめる私の心も躍る  
負けないように元気を出して  
身も心も真っ赤に燃やし  
浮かれて歌おう明日の歌を



## 夢

かわいいおばあちゃんになりたいな  
鏡を見るたび思うの 顔にだんだん張りがなくなつてね  
その分しわがふえるでしょう  
整形している人もいるとか  
私は自然のまま年を重ねたいの  
金さん銀さんみたいにしわの数だけ笑顔に変えてね  
子供たちからも愛されるような  
かわいい優しいおばあちゃんになりたいの  
たくさんの子供たちと触れ合つて  
お迎えがきたら 地球上の生あるすべてに感謝をこめて  
ありがとう ありがとう 手を振りながら  
銀河の世界へ還りたい  
お母さんただいま そう言つてね





## 弱虫退治

朝目覚め 太陽が昇れば

風に吹かれ 雨に打たれ 鳥の声を聴く

人さまとの出会い すべてに感謝しているの

生きてるって感じるから

でもね 病に侵され 手足がしびれ

身体全身に痛みを感じるとね

弱虫さんが顔を出すの

出てきちゃだめ と叱るとね

頭を下げて 後ずさりするの

がんば がんば 頑張れ広枝 と私は歌うの

するとね窓から差し込む日差しが 優しく抱いてくれる

吹き込む風と一緒に歌ってくれる

小春日和ののどかな一日

## 雲の中で

10月6日の出来事

夜明け前4時ごろ

身体が痛くって泣き出しそうになった

退院することが決まり

二トロと痛み止めをもらってたの

3度目の手術が一番ひどかった

でもね痛み止めは我慢した

強いでしょう

そんな私が 空き腹では飲まないで

と言われた薬を飲んでしまった

しばらくすると痛みが治まってね

私は雲の中

痛みから解放され 身体中の力が抜け

どこかへ吸い込まれていく

うつすらと見える白い雲

目の前も 横を向いても

ふんわりとした白い雲

様々な模様を描きながら流れるの

心地良い まるで別世界

私はどこへ行く

たぶんそのまま眠ったのだろう

目が覚めると時計の針は6時をさしていた

痛みがとれ爽やかな気分

雲に乗って憧れの人にでも会ってきたのかな

窓の外に現実を知らすカラスの鳴き声が聞こえた



## 青い空

澄みきった

青い 青い

高い 高い

広い 広い

お空を見上げる

一つだけ ふんわり浮かぶ白い雲

ねえ 私 病に負けなかったでしょう

お仕事頑張ったでしょう

ようやった ようやった

秋風が優しくなでてくれた

胸が熱くなる

頬に暖かい一滴

なぜ どうして涙がこぼれるの

## 信念の道

しっかりと大地を踏みしめてさあ歩く

一筋の希望の光を見つめて

信じる道をまっしぐら

雨も嵐もこの身で受ける

心の中まで入れない

真っ赤に燃える情熱の炎よ

ぶれない精神 耐え抜く信念

成功の夢を実現に変える

人に生まれた喜びをかみしめる

感動 歓喜 感涙の中で生き抜くために

私は歩く一筋の道を残して



## 一生懸命

私はいつからこの言葉を覚えたのだろう  
心の中を覗いてみた  
一生懸命の文字が躍ってる  
確かに運動会の朝 一生懸命走るのよ  
うん とうなずいて一生懸命走った  
お勉強も 遊びも お手伝いも  
一生懸命頑張ると大きな人になれるのよ  
それからずっと一緒だった  
笑ったり 励ましたり  
今も私のそばにいてくれる  
お前は人生の最大のパートナー

## 決意は私のコーチ

昔ね決心したと母に言っただの  
母はニコニコ笑いながらこう言っただの  
決心はね心で決めたことでしょう  
人の心は変わるもの  
しかしね  
決意は変わらない  
心に決めたことを  
しっかりと自分の足で立ち上がり  
目を見開いて進んでいく  
半紙と筆を持ってきて  
決意と書かせてね  
机の前に張ってくれた  
以来決意は私のコーチ



## 天下無敵

こんな気持ちを抱いたことがありますか

私はあるの 自分が信じてやりたい そう決めたとき  
天下無敵

矢でも鉄砲でも飛んで来い 負けてたまるか

我信じる道をがむしやらに突き進む

その時 夢と希望を膨らまし

成功したときの喜びを思い描くの

しかしこの熟語「天下無敵」は

自分のためには使えない

誰かのために役立ちたい そう決めたとき

限らない無限の力を発揮する

私は今でもそう信じてる





## 第三章 生まれ育った広島

### 山

私は山が好き

四季折々の花を咲かせ

生きてることを実感させてくれる

山奥には山奥の味がある

大峰山のふもとの森林は

時間の流れを止める

清らかなせせらぎの音は

神秘の世界へ案内してくれる

命の洗濯が出来る

下山の道にはリンドウやキキョウ

私の好きな紫に出会える

年に一度はふるさとの山に行きたい



## ふるさと

私のふるさとの一番高い山権現さん  
どつかりと大地に腰掛けて村を見下ろす  
夜明けとともに小鳥がさえずり ふもとで一番鳥が鳴く  
朝日が昇る 家々からかまどの煙立ち上る  
笑い声がこだまする 村は元気に動き出す  
野道に聞こえるわらべ歌 通勤バスも軽やかに  
太陽が真上に上がると 一瞬静かになる  
学び舎から聞こえる鐘の音 山から木を切る音がする  
西空を真っ赤に染めて日が沈む  
カラスが鳴いてお山に帰る 一日が終わる  
ふくろうが鳴いて夜が来る せせらぎの音色は子守唄  
権現さんは景色を変える

春一番に梅が咲き 桜が咲いて こぶしの白い花  
桃の花 山つつじ 山吹の花 菜の花 あやめが咲いて  
小でまり 大でまり  
夏はひまわり  
秋は可憐なコスモス咲いて実りの秋  
稲は黄金色にたなびいて 柿は色づき 栗は笑う  
村の神社の笛太鼓 年に一度の秋祭り  
神楽の舞は夜明けまで  
権現さんが美しい紅葉に染まると  
冬支度 落葉樹は丸裸  
松と杉は緑を増して雪景色を鮮やかにする  
まさに天然の美  
権現さんに守られて  
のどかなふるさとはお正月を迎える

## 棚田の田植え

あでやかな緑　よみがえる棚田  
いそいそと春の日差しの中で耕す人々  
泥だらけの汗のにおいがする  
自然と人が調和して  
働くも尊し　汗も尊し  
食が命の私達  
一粒のお米を噛みしめて  
今生きる平和な世界に感謝を込める



## 情熱「もみじ」

真っ赤に燃えるもみじ  
すばらしい　美しい　言葉は尽きない  
それは　ほんのひと時　はかなくも思う  
しかし人の情熱は  
命ある限り消えることはない  
ふるさとが好き　人が好き  
明日に向かう情熱は  
目的を見失わない限り  
青春のときめき  
めらめらと燃えつつける  
私は今それを知る　75歳の秋



## 野いちご

原爆でね 田舎に疎開したの  
お父さんの親戚の家  
近くに 堤防があつたの  
堤防の石の間から  
野いちごが生えて  
小さい小粒の野いちごが  
いっぱい いっぱい実をつけて  
私を誘う  
おそろおそろ手を出すと  
おいしいよ食べてみんさい  
真っ赤な顔で笑ってくれた  
川風がほほをなでる  
心地よい夏の昼下がり

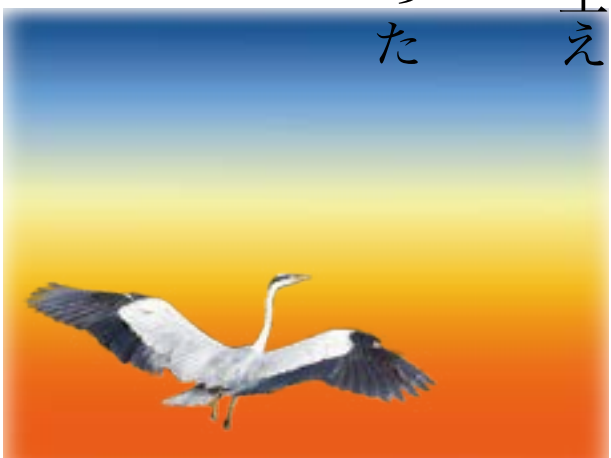


## 青サギ

太田川防水路の土手を走ると  
間隔をあけて青サギがぼーと立ってる  
お前はのんびり屋なのか  
根気がいいのか 私はアホサギとあだ名をつけた  
車を止めて近付いてみた 逃げる気配もない



灰色一色と思い込んでいた  
ところがどうして胸にオレンジの羽が生え  
スタイルもよく美しい  
潮が満ちると ふわりと飛び立っていった  
その美しさは鶴に等しい  
私はその背中に乗せると叫びたかった  
悠々と飛んでいくサギに手を振った  
西の空は夕焼けに染まっていた



## 初雪

子供の頃ね

疎開先で空一面に薄いねずみ色の雲が覆い

太陽が見えない冷え込むお昼時

きつと雪が降るよ

母が言う

さつさにご飯をかきこんで

外へ走り出す

弟も妹もついてきて 空を見上げる

時折ふんわり風に舞いながら

やわらかい雪が舞い始めた

私が上を向いて雪を口で受けると

弟妹たちは大はしゃぎ

口を開けて外庭を駆け回る

鼻や目に飛び込んでくる

貧しい農家の楽しい初雪

目を閉じると

汗をかきながら

ニコニコ笑う顔が見える

縁側に座り

「雪やこんこんと」歌った

可愛い歌声も聞こえる

初雪は私を暖かく優しく抱いてくれる

60年前の思い出だけど

今も懐かしく幸せをつれてく

## 青い空

公園のベンチに腰掛けて  
空を見上げる  
川風が優しくほほをなでる  
ふんわりと浮かぶ  
白い雲  
孫悟空が下界を見おろしているかな  
はすの台座に似た雲  
仏様がお座りしてる  
お観音様に似た雲  
お地藏さんに似た雲  
頭の上を西へ流れていく

真っ青な空に  
銀色の飛行機が東へ  
白い飛行機雲が道をつけていく  
私は自分に言い聞かせる  
生かされている  
生きている  
信じる道をひたすらに  
命ある限りと



## ピカドン

ピカドンって知ってる

そう それはね昔

広島に落とされた原子爆弾のことなの

本当に恐ろしい爆弾だったのよ

ピカ

光はね稲妻の数百倍 誰も見たことのない光

ドーン

音はね大地が割れるような 誰も聞いた事のない音

熱線はね太陽に等しいとか

地上に降り注いだ熱は4000度と言われているの  
すごいでしょう

ビルからは一瞬にして火柱が立ち 街が燃えたの  
数十万の命を奪っただけではないの  
得体の知れない放射能はね  
30キロも離れた所まで黒い雨を降らせ  
無傷の人の命も奪ったの  
そしてね 生き残った人の心までずたずたにしたの  
恐ろしいことでしょう  
ビルを破壊し 家を壊し  
人間も馬や牛や犬猫ねずみも  
木も草も花も  
空飛ぶ鳥も小さなありんこも命あるもの  
すべてを焼き尽くし灰の町にした  
恐ろしい1発の爆弾  
これが ピカドン

## 小さな平和の天使たち

7月の末

私初めて保育園に呼ばれたの  
原爆記念日がくるので  
体験を話して

園長先生からの電話

少し不安だったが引き受けた  
たずねると

かわいい かわいい年長さん

26人の元気な声と

笑顔に迎えられた

どんな話し方を

とまどう私に

真剣なまなざしが飛び込んで

元気をもらった

しっかり聞いて

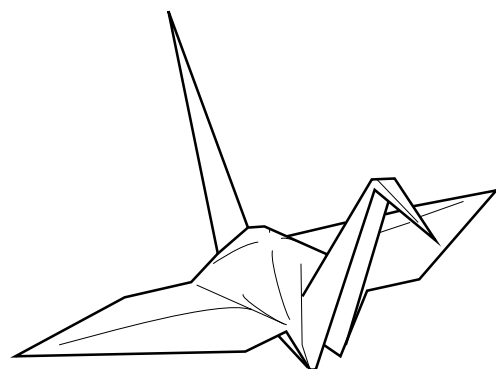
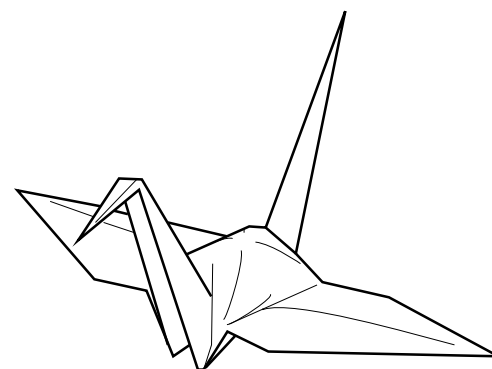
しっかり質問する

あとで絵を描いてくれるという

書きあがった絵を見てびっくり

すごい表現力

これぞまさしく平和の大使さん



## かけがえのない私の宝物

私は被爆者

被爆者だから与えられた使命がある

平和公園に訪れる子供たちに語りかける

戦争を知らない子供たちが

犠牲になった御霊に折り鶴をささげ

手を合わす

言葉をつないで平和宣言をする

声たからかに平和の歌を歌う

感涙の中で私は言う

今の平和に感謝してね

命を下さったご両親

お世話してくださる先生にも

感謝の気持ちは情熱に変わる

情熱は力なの

優しい気持ちで相手を思いやる

いたわりあう

そこから始まる平和な世界があるんだと

子供たちは目を輝かせ

大きな声で約束してくれる

これが本当の宝物

子供達の未来よ幸せであれ

この宝物は来世まで懷に抱いていく

## 平和公園

今日も観光バスが並んでる  
世界中から集い来る人の波  
世界遺産の原爆ドーム  
ようきんさつたと出迎える  
ここに眠る数十万の御霊 夾竹桃は語りだす  
戦争はおろかなこと  
核は無限に恐ろしいもの  
69年たった今も命を襲う  
だけど忘れてはいけんよ  
原爆は生き残った人の心までずたずたにした  
広島の人たちは  
犠牲になった方々に祈りをささげ  
涙を吞んで 苦渋の汗を流して復興に命をかけた

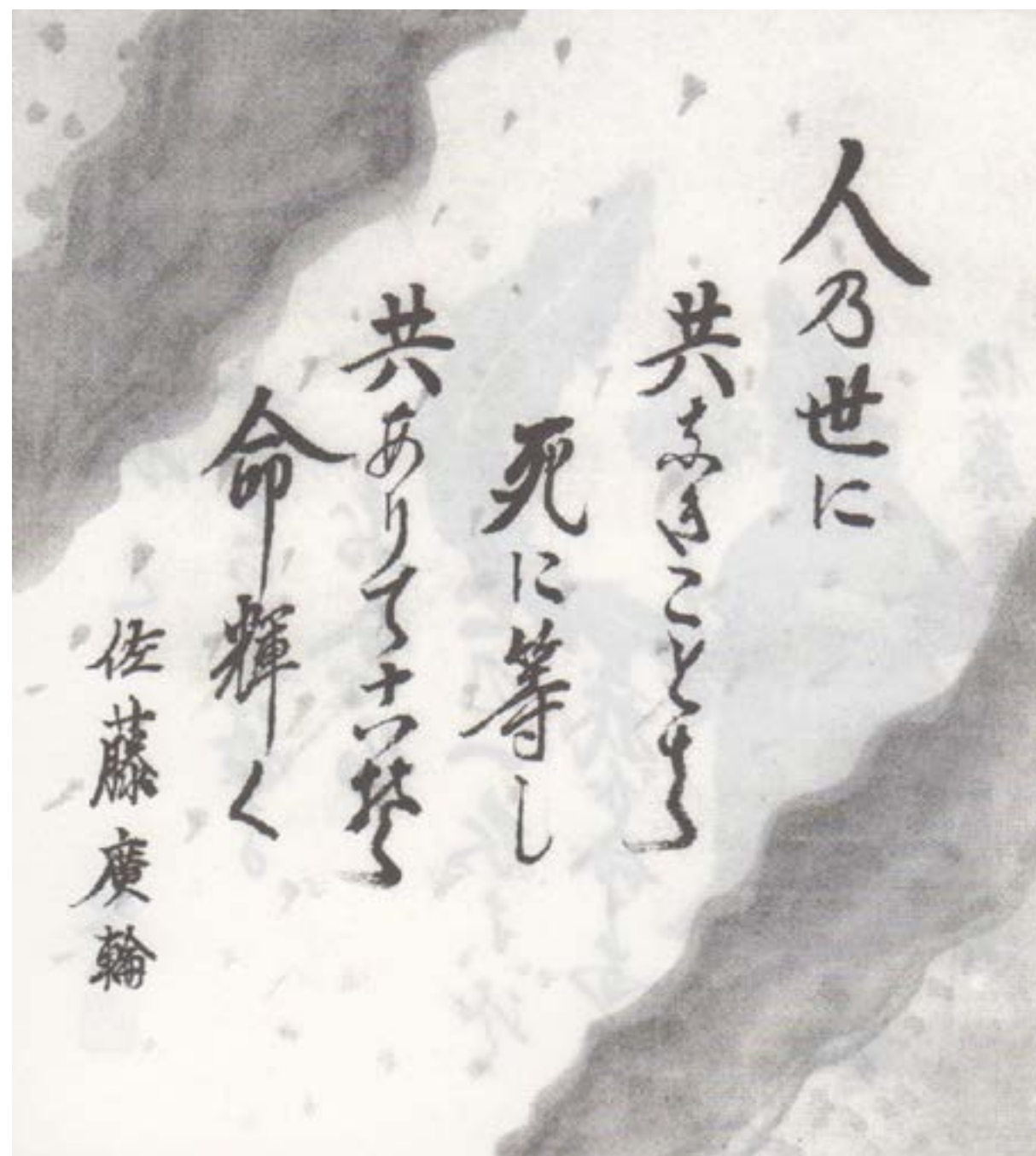
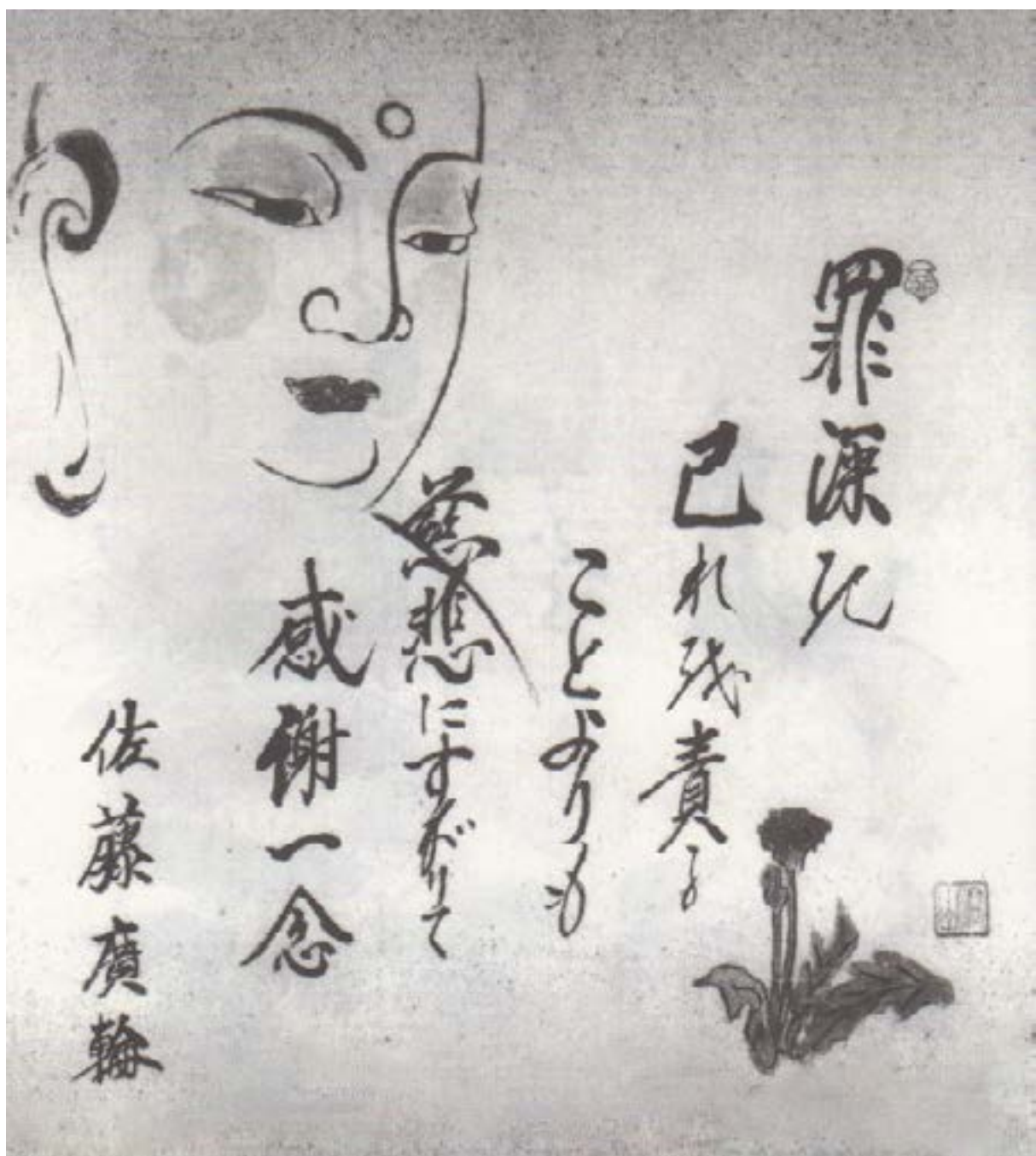
わずか数十年で平和国際文化都市を築いたよ  
人間は強く たくましい  
そして生きることばらしい  
悲しみに耐え 憎しみを乗り越え  
人類に核廃絶と世界恒久平和実現のメッセージを送る  
広島は素敵な街だと伝えてね



## 未来を担う子供たちへ「願い」

私は子供たちへ伝えたい  
みんな顔が違うようにね  
好きなことも 出来ることも 出来ないことも  
それぞれ違って みんな良い  
だからね助け合えるの  
いたわりあえる  
大切なことはね  
自分に出来ること好きなこと  
一生懸命努力する  
それでいいの  
それがね 自分のため 社会のため  
でも一つだけ  
約束して欲しいことがある

尊い命は お父さん お母さんからの頂きもの  
心のそこからね  
ありがとう といってみて  
お父さん お母さんの  
笑顔はあなたの力になるの  
学校では 先生に お友達に  
ありがとう といってみて  
ありがとうは素敵な言葉  
感謝の気持ちかわいてくる  
その力でね 今日を楽しく生きてほしい  
優しい気持ちでいたわりあう 支えあう  
そこから始まる  
平和な世界を築いてほしいの



## 第四章 母の言葉



## 頑張ろうね

原爆で焼け野原になった場所を

何日も兄を探して歩き

材木町で兄の死を受け入れたときのこと

おうちが焼かれたことも

お兄ちゃんがなくなったことも

心に残すと不平不満になる

不平不満は爪めの先に少しでも残すと

一寸先は真暗闇

でもね 奇跡に奇跡が重なって生き残った

生き残ったことを感謝しようね

お前の顔が見れる 皆の顔も見れる

太陽が拝める

あたりを見れば

感謝する事は山ほどある

感謝の気持ちは情熱に変わる

情熱は力に変わる

その力で生きていこうね

生きてくても生きることができず

無念の死を遂げた人たち

お兄ちゃんの方まで生きようね

頑張ろうね

頑張ろうよ

それから77歳の生涯を送るあいだ

苦しい悲しいの言葉は使いませんでした

## 小学校の門前

広枝

この門をくぐると

お前はもう子供じゃないのよ

小学生という学生になったの

人様のお話が聞ける

お勉強もできる年になったの

でも心配することはないよ

学校には先生がおられる

お家のお父さんお母さんの

代わりをして下さるのが先生なのよ

先生を好きになれば好きになるほど

先生のお話がよく聞こえるのよ

でも耳には穴が開いてるでしょう

右の耳で聞けば

左にスーと逃げる

左の耳で聞けば

右にスーと逃げる

でも両方の耳で聞けば

心にもうひとつの耳ができる

心の耳で聞いたことは忘れない

今度お母さんに会ったとき話してね



## 5年生の時

夕食後

縁側に肩を並べて座り

満天の星を眺めながら

広枝や この地球上に星の数ほど

いや数え切れない命の中で

言葉をもらった人間に

生まれた事を感謝してね

愛を使い分ける事が出来る

知恵を使うことができるのはね

人間だけなの

命あるものの中で人間が最高なのよ

神様だって 今度言葉を持つ人間に生まれたくって

天国で修業しておられるかもしれないよ

おまえはその最高のところへ生まれてきた

私の体はそれとおりの道だったのよ

いつかおまえが

親孝行したいと思った時

周りの人にやさしくしてね

残念なことは

母の生前中

私はこの言葉の

本当の意味がわかりませんでした

今なんとなくわかる気がしています

## 人間は動物とは違う

ある日

野良猫がトカゲをとってきて

目の前のなす畑で

首を縦に振りながら食べていた

気持ちが悪いので戸を閉めようとする

座りなさい よく見ておきなさい

食べ終わるまで見せられた

ねえ 食べるだけなら

野良ネコだって食べていくの

人間に生まれたからには

食べるだけでは意味がない

多少なりとも

人さまのお役にたたなければね

人さまのお役に立つということはね

何かをさせてください

おまえがへりくだることではないよ

何かをしてあげた

おごった気持でもないよ

今おまえにできることを

一生懸命努力する事

これがお前のため

家族のため

やがて社会のためになる

## 自由がお前への最高のプレゼント

新学期が始まって  
学校から帰ってくると  
母が縁側に腰掛けて  
私の帰りを待っていた  
かばんを縁側に置かせ私の手を引いて  
丘の栗林へ連れて行った  
広枝ここに大の字になって寝てみなさい  
言われるままに両手を広げ大の字に草原に寝た  
若草の甘い香りを  
優しい風が運ぶ  
背中にポカポカ土の温かさが伝わる  
新緑の栗の木の隙間から青い空が見える  
太陽が私の全身に降り注ぐ

どうだ気持ちいいだろう  
うん　とうなずく  
これが私がお前にあげる贈り物だよ  
不思議な顔をする私の手を引っ張って起こし言った  
あんな  
本家のような  
分限者に生まれてきたら  
親からもらった財産を  
守るために心痛する  
まかり間違って皇室に生まれたら  
箸の上げ下ろしも自由にならん  
しかしおまえを縛るものは何もない  
この自由が  
私からの最高の贈り物だよ



### 3本の道

山の中で重たい炭を背負って降りてくる途中  
休憩場所で

広枝　ここから3本の道が見えるのだろう

1本はバス道　1本は里道　1本は獣道

今　おまえにどの道を歩いてもいいよ　と言ったら  
おまえはどの道を歩く

私はすかさずバス道と答えた

すると母は　あれはね人さまがつけた道なのよ

おまえが目を皿のようにして歩いても

おまえに得るものはない

里道はどうだ

四季折々の草花が咲いて優しさをくれる

獣道に入ったらどうだろう

人さまが歩いたことのない道

一歩入れば千尋の谷があるかもしれない

たとえ落つこちても今のおまえなら

きつとよじ登ってくれるだろう

その奥に行くと　水晶の宝の山があるかもしれない

またその奥に行くと

山ユリが一輪咲いているかもしれない

おまえは何を感じるだろう

でもね山ユリはおまえに出会ったときつと喜ぶよ

この獣道で体験することは

だれにも取られないおまえだけの宝だよ

母さんはね

勇気と冒険心を持って獣道を歩く人になってほしい  
今この年でこの言葉の意味がわかる気がします

## 命輝くとき

本当に命が輝く時は  
人の為に生きることが  
自分の喜びになる時よ  
今この言葉の意味がはつきりわかります  
思い起こせば確かに子供のころ  
お母さんが喜ぶ笑顔が私の喜び  
弟妹の笑顔も私の喜び　生きがいでもあった  
好きな人ができた時  
その人の役に立ちたい  
結婚したら子供がほしい  
子供が生まれたら  
子供のために無償の愛も知った  
子供のため　孫のため

そして今は  
私の周りの未来を担う子供たちのため  
何か自分にできることを追い求めながら  
一つの願いが達成できた時  
その喜びをバネにして  
明日に向かって頑張る  
考えてみると　母は私の心の中に今も生きている  
苦しい時も　悲しい時も　うれしい時も  
新しいことに踏み出す時も  
いつも二人三脚そんな気がする  
私は母にいただいたこの命  
母の望んだ生きかた  
教えをこの身に刻んで生き抜きたい  
目を閉じるとき  
母の懐へただいまと帰るために



# 第五章 私の人生



「頑張って歌って笑う人生」

父が好き 母が好き

弟が好き 妹が好き

山が好き 田んぼが好き

青い空が好き

小鳥がさえずる大自然が好き

一生懸命の私が大好き

頑張る私はもつと好き

朝が好き 朝日が好き

花が好き 道草が好き

小川が好き メダカが好き

力強く流れていく大川が好き

夜明けとともに働く人が好き

汗を流すわたしが大好き

明日を歌う私はもつと好き

先生が好き 友達が好き

学校が好き 遊びが好き

鐘の音が好き 静かな時が好き

さんと輝く太陽が好き

元気いっぱい仲間が好き

笑顔で生きる私が大好き

夕陽を見送る私はもつと好き

## 北国の春

北国の春は神秘的

雪に閉ざされた白銀の世界

沢の南斜面に熊笹が揺れる

可愛い黄色の福寿草が顔を出す

小川にヤマメがちよろちよろと

クレソンの間から姿を見せる

雪が溶けて大地に目を吹く

茸きの塔が

丸るく丸く輪になって

お手々つないで躍り出る

牧草畑が青々と草原に変わる

タンポポが咲きみだれ風に歌う

白樺芽吹き北国の美しき春

春駒元気に

お尻を跳ね上げ飛びはねる

母親 優しい目をして寄りそう

お馬の親子

本当に仲良子良し

ヒイヒーン

お馬のいななき空に舞う

牧草畑に乳牛群れて喜びの声

モー

酪農農家は春一番に動き出す

## 酪農農家の思い出

酪農農家は自給自足

本当につらい日々だった

春雪解けを待つて 荒地の開墾が始まる

私が一人増えたことで農地を広げるため

から松の根つこを二頭引きの馬でほりおこす

熊笹を大雑把に刈り込ん

二頭引きの馬にすきを付け耕す

それをならす道具の名前は忘れたが

それに人が乗って平らにしてい

荒れ地に最初にまくのはそば

白い花を咲かせ

いっぱい いっぱい 実をつけた

2年目の土地にはエンドウ豆を植えた

広い畑の草取りは

私にとっては泣きべそ仕事

そして3年以上の畑には

まず菜の花 菜種油の原料

ビート畑 これは砂糖大根とも言つて砂糖の原料

麦 家族用

燕麦 馬の飼料

かぶ 家族用と牛用

人参 家族用と家畜用

トウモロコシ 家族用と家畜用（デントコーン）

大根 ホウレン草 じゃがいも 金時豆 おたふく豆

これらは家族用

かぼちゃ 家族用は金トンと言

家畜用は馬鹿でつかくなる

おながすいて

月明りで大根を抜いて

菜っ葉で土を拭いて がじがじ

砂の音を立てながら食べた

その砂の音は今でも忘れない

しかし大根の甘みも

本当にいろんなことを体験した

40町歩が1軒

隣に行くにも馬

町の行くにも馬

冬は馬糞（ばそり）

雪が解ければ馬車

裸馬を乗りこなし

人馬一体とはよく言ったものだ

馬はくつわをかけて 道具を付けると  
もう何をするかわかつてる

北国の日暮れは早い

特に冬は日の高さを常に見ていないと

日が落ちると我が家に帰るのも困難

家の明かりが見えたとしても

沢がある はまれば命がけ

1度だけ命からがらずぶぬれになって

やつとの思いで家にたどりついたことがある

考えてみると

窮地に一生

何度体験したことだろう

## 不思議な姉妹

母は兄が亡くなっても

仏壇には5分と座らなかった

しかし6年間

陰膳お供えすることはやめなかった

それを長女の私がいただくのが務めだった

そして珍しいものも

畑でできた初物も

なんでもお供えする

そして

ありがとうございます と一念唱える

ありがとうございます

感謝の一念はねどんなに忙しくても

朝晩できる

そう教えた

しかし同じ姉妹なのに

叔母は神様の祝詞に始まり

仏壇に向かい

1時間もかけてお経を読む

お観音様とお地藏様に

般若心経を3回唱え

それを朝夕欠かさないで繰り返す

私は素晴らしいお経も

大事かもしれないが

母の教えた感謝の1念に

勝るものはないと思ってる

## 体験は宝「随筆」

昔 お嬢さんから

原爆のため農家の居候になった

お家を焼かれ 大好きなお兄ちゃんを奪われ

戦争を憎んだ 原爆を憎んだ アメリカも憎んだ

外人さんを見ると腹が立った

父ちゃん母ちゃん ハングリ ハングリ

言ったらチョコレイトくれるよ

そう言つてアメリカ兵を追いかける

子供たちまで憎かった

母も憎んだことがある

確かに優しい時もあった

厳しい時 それでも母がいたから耐えられた

たった一人で8日間のかかる北海道に預けられ  
学校にも行けず

ただ奴隷の様に働かされた

自殺未遂もした

しかし助けられてしまった

生き運が強く15時間で目が覚めた

神棚の前で目を覚ました

生きていた事を恨んだ

楽になりたかったのに

3年過ぎてもほっておく母が許せなかった

子どもを産んだことのない

叔母の仕打ちも許せない

二人を抗議するための自殺なのに

失敗に終わった

悔しくって 悔しくって たまらなかった  
完敗した気分

気がついて うーん と唸り声をあげた

私の寢床に叔母が飛んできた

手のひらで私のほほを両びんた

首は紫にはれ上がり

右も左も向けない 無抵抗のまま

この罰あたり女が

一つしかない命 何を考えてる

抱えるようにおこし

軍隊のつなぎの服を着せ

2重の玄関から 雪の上に突き飛ばされた

身動きできないでいる私に

今度はバケツが2つ飛んできた

冷たい雪に両手について

起き上がろうとすると

そこへ天秤棒が飛んできた

当時どこの農家にも水道がなく

井戸であつた

しかし浅い井戸は役に立たない

凍りついて

沢の脇水は真冬でも凍らない

家庭の水も

家畜の水も

そこから人力きで担ぐしかない

命を祖末に考えた罰だ

一人で全部汲みなさい

長靴に縄を縛り滑り止めにして  
天秤棒にバケツを引つ掛けて  
首が動かないまま沢に下りる  
涙が滝のように流れる  
悔しさと 憎しみと 情けなさ  
生き残った事が恨めしく  
目から鼻から 口で止めるどころか  
顎から流れ落ちる  
止めても止めても 止まらない  
首が痛いのに ヒヤツくりまで  
その時始めて  
体中の水分が全部流れていくような  
涙を流した

3年4ヶ月  
私はやっと叔母から逃げて  
中標津中学校のそばにある交番に逃げ込んだ  
母に帰りたいと連絡をしてもらい  
当時8000円送ってもらった  
私はそれで広島に帰る事が出来た  
帰ると決まった日  
叔母は私の前でお行儀をして  
向かいあつて話し始めた  
姉は本当に幸せ者だ4人の子供に恵まれて  
1人ぐらい いやおまえがほしかった  
それは叶わないんだね

広枝 私は決しておまえが憎かったのではない  
私の命は3年と言われた

3年間でおまえを一人前にしたかった

私の財産はすべておまえのものなんだよ

確かに馬は品評会で1等賞2等賞が何頭もいて  
1等100万の値がついていた

私は叔母に言った

叔母さんのものはなんにもいらない

1つのおもちを たとえ6つに分けて食べようと  
お母さんと一緒にいたい

それなら何を言っても無駄だね

でもおまえは本当によく辛抱してくれた

今のおまえなら

たとえ農家に いやどこへ行っても大丈夫

私はこの3年間本当に幸せだった

おまえとの生活は本当に楽しかったよ

私は心の中で 嘘 と思っていた

広島へ帰っても家を1軒立てるのは大変だよ

ここはおまえの物になる

そんな言葉も私には聞こえない

いいや 私は自分の力で立ててみせる

そうか

でも私はおまえの家には玄関からは入れない

家を建てたら

トイレの窓を1センチ開けておいてくれないか

ばかばかしい

と思ったが私は返事をしなかった

馬櫓の支度をして  
手伝いのおじさんが

駅まで送ってくれる事になった

叔母が手縫いで縫ってくれた

紺の服 上下

それだけを手土産にもらい

あとの荷物は汽車でおじさんが贈ってくれた

中身なんか私にはまったく興味がなかった

馬櫓に毛布を敷いて 湯たんぽを入れて

おむすびと水筒を持たせ

リックサックに道中で食べられる物を詰め込んで

一緒に馬櫓に乗り込んだ

てつきり中標津駅まで送ってくれるのか

と思い無言で座っていた

## 中標津の飛行場

滑走路まで来ると馬をとめた

隠しきれない涙の顔をあげて

私はここで別れるよ

本当に今までありがとう

お前はどこへ行っても

もう恥をかくことはないよ

よく頑張ったね

姉さんによろしくと伝えてくれ

おまえに最後のお願いがある

1度でいいお母さんと呼んでくれないか

私はいきなりで冗談でしよと思った

私の母は世界中探しても

広島にいるお母さん ただ一人よ

おじさんが馬櫓を出した  
叔母は馬櫓に手をかけて  
私に追いつがった  
その手を振り切つて  
私は後ろを振り向かず帰途についた

今もその姿が私の脳裏に残つてる  
それから2ヶ月後  
叔母はこの世を去つた  
その時始めて叔母のために涙を流した  
当時お金もないので母だけがお葬式に行つた  
私はその時できれば  
今一度叔母の顔お見たいと思つた  
しかし旅費もできず  
ただ夜空の星に手を合わせた

私はいま75歳  
14歳から17歳までの  
遠い思い出なのに  
昨日のようににはつきりとよみがえる

母を叔母を憎んで恨んで  
悔し涙を流した事が  
この身に刻みこまれてる  
私はあの時があつたからこそ  
本当の苦しみを知つた  
耐えぬく力をもらつた  
物事に挑戦する勇氣も根性ももらつた  
よくもあそこまで鍛えてくれました  
今は感謝の気持ちでいっぱいです

母が教えてくれた  
体験は誰にも取られない

お前だけの宝だと

今 はつきりとそう思う

子どもを持てなかった叔母

今なら お母さん と呼んであげたい

母にも叔母さんにも育ての母として

二人の母に感謝をこめて

ありがとう

大空に向かって力の限り叫びたい

本当に 本当に ありがとう

叔母は信仰家で

仏様にお参りするときは衣に着替える人だった

私もお参りするとき 3年間それを着せられていた

門前の小僧習わぬ教を読むと言うが

私は毎日仏壇には浄土宗のお経を

お観音様とお地藏様には般若心経を唱えさせられた

朝3時起床 お参りを済ませ

馬に飼い葉を与え 牛にえさをやり

糞をかたずけて 乳を縛り沢に冷やして

いつも7時頃になる

そこで初めてストーブに当たることもできるし

朝食にありつける

ここで私はいろんな事を学ぶことができた

この3年間で語れば

とてもとても語りつくせないが

この体ははつきりを覚えてる

## さみしさに涙

私はいろんな目にあつたせいなのだろうか  
いつからか勝気な子と呼ばれていた  
確かに負けず嫌いになつていたと思う

我慢強かつたとも思う

13歳まで育つた広島之母のもとから離れ

最北の北国

根室国中標津の叔母に預けられた

私は母が恋しくつてセンチメンタルになつた

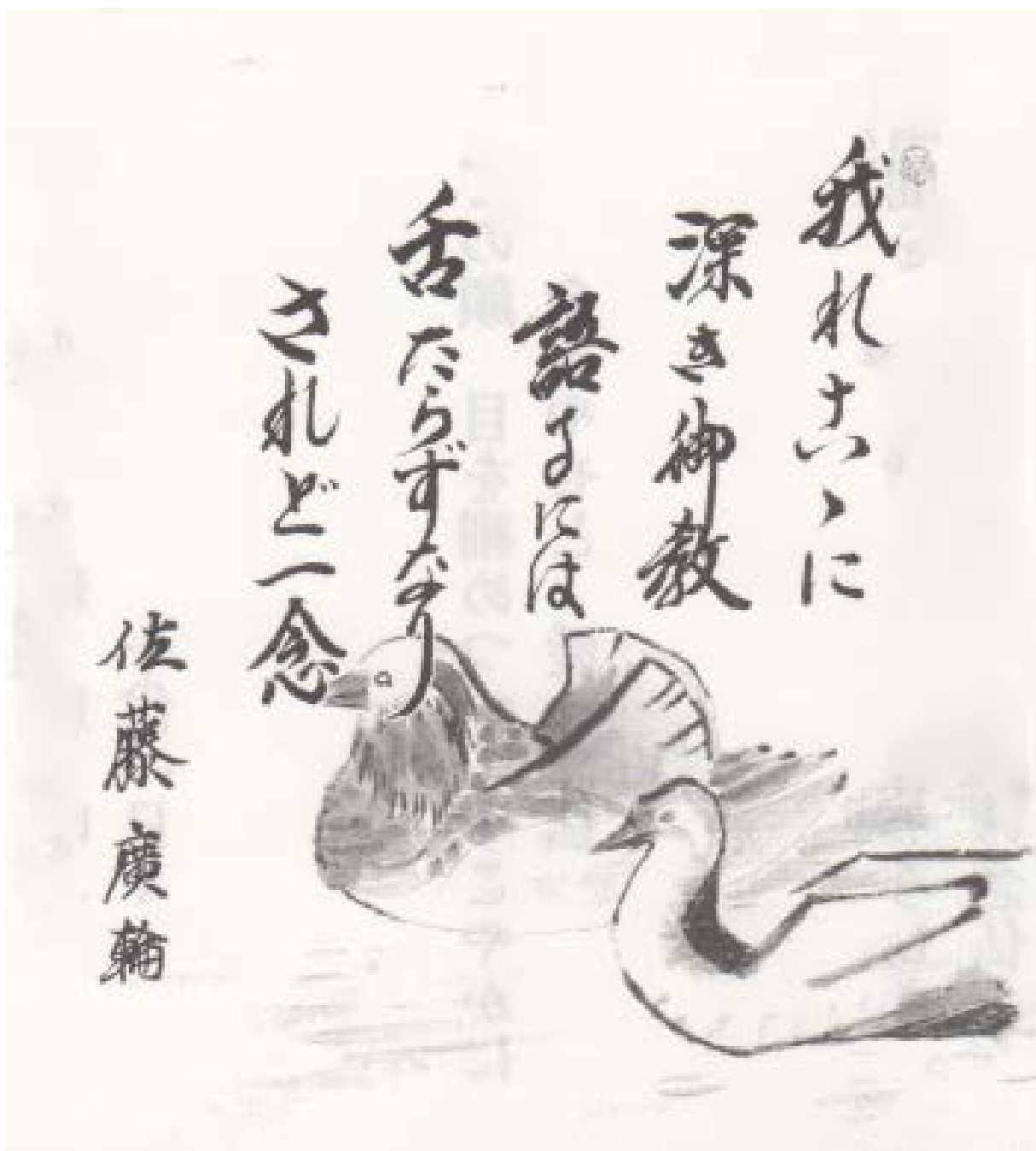
夜空の星を見ても

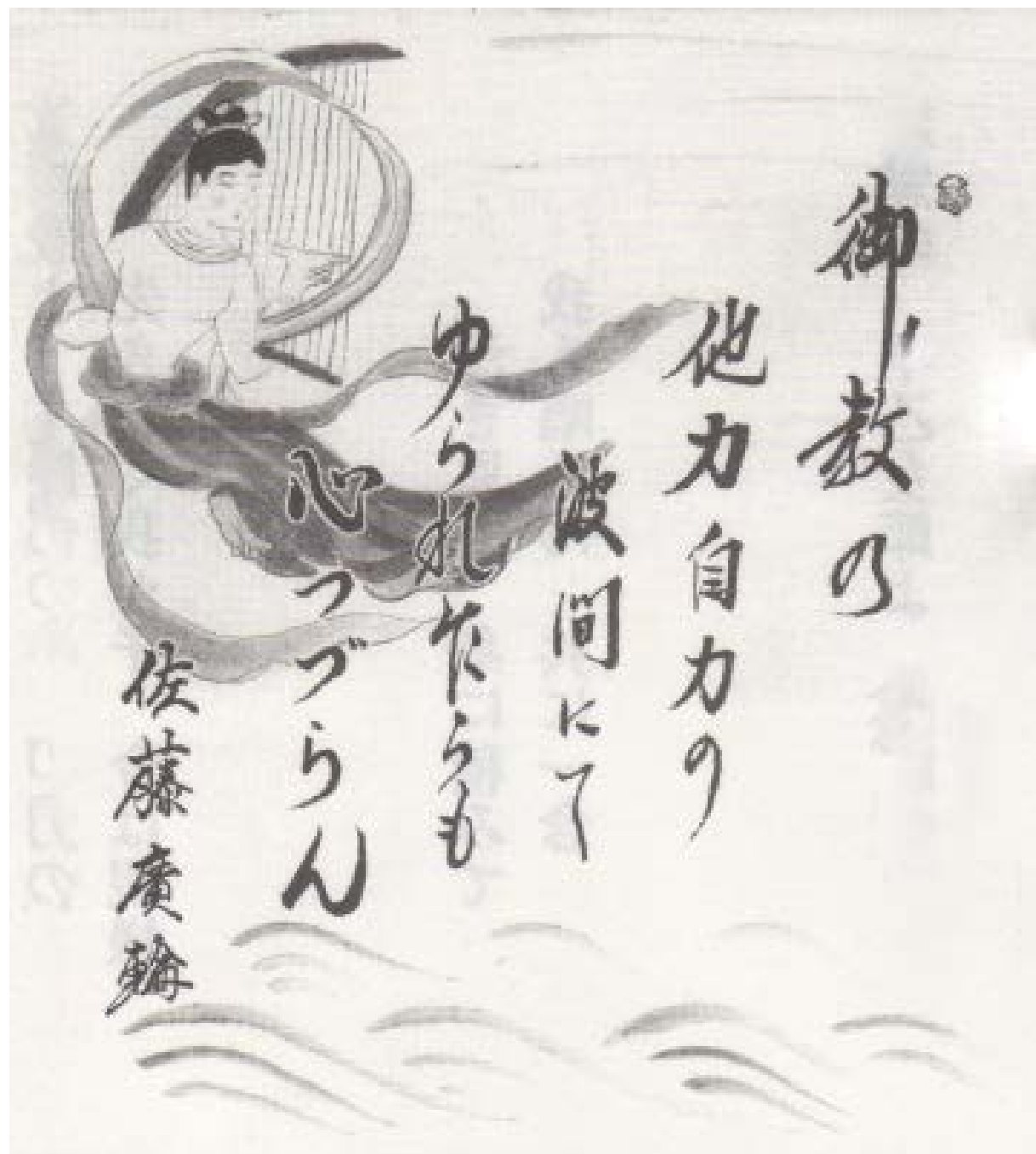
お月さまを見ても

涙を流した日々があつた

今もあの日の

おかつぱ頭の私の顔が見える





第六章 四十八句集

寿

松に目出たしたくましく  
竹は根張りの忍耐が  
梅を和くやさしさを  
桃を祝いてひなまつり  
育生即ち愛と呼ぶ  
桜一枝心に咲かせ  
歓喜感謝の花びらを  
重ねる人生春爛漫

佐藤廣輪

あるがまんま そのまんま 感ずるまんま  
心のまんま 四苦八苦を詠んでみる。

幸いなことが一つある。学もなし、財もなし、名誉も  
誇りも、すべてなし。無い無いづくしは気が楽で、思  
いのまんま生きられる。

母が教えてくれました。

宇宙の大自然のその中で、言葉をもらった人の世に生  
まれたことを感謝しろ、感謝に生まれる情熱で世間の  
荒波越えて行け、人に生まれたよろこびを、しっかり  
しっかりかみしめて、真っ赤に燃える西空へ帰って来  
いと言っていた。

☆ ひざまずく 仏の慈悲に いだかれて

我は唱えん 謝して一念

☆ 御仏の 慈悲にすがれば いとやすし

自力の心 捨ててさわやか

☆ 羽衣を まといて誓う この一念

共に唱えん 共に歩まん

☆ 御仏の 慈悲深さを 身に積みめば  
天高くして 星は輝く

☆ 捨て難し 自力の心 振り捨てる  
親の導き 信ずればこそ

☆ この時の 恵みにひたすら 手を合わし  
与えられたる 道を一途

☆ 罪深き 己を責める ことよりも  
慈悲にすがりて 感謝一念

☆ 昇る日に 命つきるも 惜しみなく  
今を限りと 咲くや朝顔

☆ 月を見て ほほを伝わる ひとしづく  
母よ恋しと 永遠の別れよ

☆ 人生の 山坂越える 力とは  
命もやせる 道に立つこと

☆ 阿陀たのむ 荒れて狂いし 心田に  
黄金にみのる稲の一株

☆ 御身足を 血潮にそめし 御教えに  
我は続かん 共と手を取り

☆ 黒衣を まといて悟る お念仏  
この一衣こそ 我が命なり

☆ 仰ぎ見る 日越の紅葉 美しく  
こけむし萌ゆる 静かなる寺

☆ 人の世に 生まれしことを よろこびて  
語りつくして 唱いつくして

☆ 我が子等を 育てていると 思いきや

育てられる 今日のこの身よ

☆ さずかりし 今日の命 よろこびて

語りつくすや 親の恩愛

☆ サボテンの 花に重なる お母影に

ひとり語るや 今の出来事

☆ 雲海の 上に昇る 陽をあびて

心しずかな 山のいただき

☆ 時を過て 嵐を越し 一輪の

花に水さす 他力念仏

☆ 御教えの 本願他力の お念仏

唱えば涙 涙こぼるる

☆ 北国の 空にひとすじ がんの群れ  
鳴く声悲し 母よ恋しい

☆ 御教えの 他力自力の 波間にて  
ゆられながらも 心つづらん

☆ 悟るとも 悟らせるとも 出来ぬれど  
我は唱える 親の念仏

☆ 御慈悲よ 本願他力の 御念仏  
先き亡く我が子 今は親様

☆ 二方の 深き恩愛 身に積みて  
我も唱えん 共に一念

☆ 親鸞の 早乙女節よ 錦織寺  
この経こそぞ 衆生の唱宴

☆ 我が心 迷いさまよう おろかさを  
この一念に この一念に

☆ 今悟る 花の盛りを うぬぼれて  
うかれ桜の むなしき日々を

☆ 我ここに 深き御教え 語るには  
舌足らずなり されど一念

☆ 積る雪 凍つく空に 親を呼ぶ  
涙に暮れた 十代の日々

☆ まごの顔 目を細めつつ すこやかに  
命もやせと 愛の念仏

☆ 暗闇を 手さぐる時の おそろしさ  
打ち消すすべは 我の念仏

☆ 親の道 親いて歩く 日をあびて  
己れに生きて 闇にさまよう

☆ ありがとう かすれ消えゆく 母の声  
ほほずりむせぶ 永遠の別れに

☆ 濁流に のまれし命 さずかりて  
何と受けるや 何と生きるや

☆ ありのまま 衆生の命 愛しいと  
抱いて下さる 大きな慈悲よ

☆ 起き上がる 涙の日々よ ありがとう  
命輝け 生きて輝け

☆ 人の世に 友なきことは 死に等し  
友ありてこそ 命輝く

☆ 御教えの 本願他力 お念仏

この一念なり この一念こそ

☆ 連れられて 親鸞様の 足跡を

たどる旅路に 涙こぼるる

☆ 我が心 迷いにゆられ 弱きもの

一念に伏し 一念に立つ

☆ おさな子よ 親の愛こそ 無償なり

心に受けよ 受けて一念

☆ 御教えの 久遠の光 身に受ける

私のゆく道 我決めてこそ

☆ 我が命 凍てつく暗に 沈めるも

生きる仕打ちを いかにあたえるや

☆ 今悟る 親なればこそ きびしくも

しかりさとすも 大きな愛と

☆ 暗闇に 立木さくよな 鳥の声

恐怖に暮れた 過去の思い出

☆ 若小馬の はしゃぐ姿よ 空青く

土の香りに 夢もふくらむ

私は人生でどん底の思いをしました。バブルがはじけ、その波に乗り遅れた。自分も始めて体調不良を覚えめました。未破裂脳動脈瘤 9ミリが見つかり、仕事があまくいかないうえに、頭痛や高血圧と最悪。手術を受ける勇氣もない。その上、弟が癌の宣告。既に手遅れの状態。もうどうするすべも見当たらないが、弟を励ましながら心を決めた。もう2人とも亡き母にすぎるしかなかった。「同じ母から生まれたことを感謝しよう。そして頑張りぬいて、母さんただいま、そう言う。」と。

叔母が教えた経を唱えなくなった。しかし万が一弟が先に行ったら、私の経で母のもとへ還してやりたい。その一心で浄土真宗本願寺派の本山錦織寺で得度を受け、3年の通信教育を受け、経を正式に覚えた。

3年間弟は生き抜いてくれた。私は自宅葬で見送った。その後3日間水だけで四苦八苦、48句を読んだ。きつかけは經典の裏にあつた親鸞聖人の詩でした。

あちらなる 越後の山に 行き疲れ

足も血潮に 染めしばかりぞ

この一詩に涙した私は、涙が枯れたとき一つの光を見つめました。

法名 廣輪



あとがき

私の人生の出来事を本にできました。このことは何事にも変えられない喜びです。今亡き広島経済大学の専務理事 川村毅先生のお力添えと、森本順子先生が子供を諭すように5年の歳月をかけて私を育ててくださったおかげです。その上、本当に多くの方々のご厚情に支えられましたこと深く感謝します。

困難な状況に直面しながらも、ぶれないで自分の信じる道を歩くことができましたのも皆様方のお陰です。本当にありがとうございます。

何よりも嬉しいことは、孫の目に触れ、孫の手で編集してくれた事。私はにとつては、人間として生まれた、最高の喜びを感じています。

孫が手助けしてくれ、わずかひと月で完成させてくれた。嫁にもありがたいの言葉を贈ります。この本は親子三代の心の絆で完成しました。一つでも共感していただければこれに勝る幸せはありません。感謝。

佐藤 廣枝

菜の花のように  
2014 年 3 月 初版第一刷発行

著者 佐藤 廣枝  
編集 佐藤 菜笑  
佐藤 敏子